



Data

監督：杜琪峰（ジョニー・トー）
 出演：黄秋生（アンソニー・ウォン）
 / 吳鎮宇（フランシス・ン）
 / 張耀揚（ロイ・チョン）/
 林雪（ラム・シュ）/ 張家輝
 （ニック・チョン）/ 何超儀
 （ジョシー・ホー）/ 任達華
 （サイモン・ヤム）（特別出
 演）/ 林家棟（ラム・カート
 ン）/ 任賢齊（リッチー・レ
 ン）

👁️👁️ みどころ

これぞ香港流、男の美学！これぞ杜琪峰（ジョニー・トー）流、ド派手な銃撃戦！テーマはズバリ5人の男たちの絆だが、裏社会に生きる彼らには殺すか殺されるかの選択と、再三再四の銃撃戦が。

5人の男たちの美学を、健さんこと高倉健の日本流ヤクザの美学と対比しながらじっくりと味わいたいが、残るのはカッコ良さ？それとも虚しさ・・・？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ ジョン・ウー監督に続く、香港出身の世界的監督に ■□■

杜琪峰（ジョニー・トー）監督の最新作は、08年9月9日に観た『僕は君のために蝶になる』（07年）だが、これは李冰冰（リー・ビンビン）をヒロインとしたちょっと不思議な女性映画。また黒澤明監督にオマージュを捧げた『柔道龍虎房』（04年）はお遊び的映画（『シネマルーム17』90頁参照）だったし、『エレクション』（05年）は選挙（エレクション）をテーマとした黒社会の多数派工作がテーマ（？）だった（『シネマルーム17』67頁参照）。香港出身の監督といえば、現在公開中の製作費100億円の超大作『レッドクリフ』（08年）の吳宇森（ジョン・ウー）監督が世界的に有名だが、近時の『エレクション』『エレクション2』（06年）の実績によって、ジョニー・トー監督はジョン・ウー監督に続く香港出身の世界的監督となつたらしい。

■□■ やっぱり、こっちがジョニー・トー監督の本流？ ■□■

私は彼の出世作となった1999年の『ザ・ミッション/非情の掟』を観ていないが、

ライターである浦川留氏のエッセイ「やばいほどカッコいい男たち。」によると、『ザ・ミッション／非情の掟』は『エグザイル／絆』のパラレルな前篇というべき映画らしい。つまり、両者ともやばいほどカッコいい「男たちの映画」というわけだ。香港フィルム・ノワールの代表作は『インファナル・アフェア』三部作（02年～03年）だが、まさにジョニー・トー監督の『ザ・ミッション／非情の掟』と『エグザイル／絆』はその系譜を継ぐ、正統派香港フィルム・ノワールであり、男たちのロマンが漂う映画。

とはいっても、香港フィルム・ノワールの魅力は、韓流や最近の邦画界に多いイケメン男子の魅力ではなく、寡黙で無器用ながら実行力抜群の、いわば高倉健のような中年男の魅力。やっぱりジョニー・トー監督の本流は『僕は君のために蝶になる』のような女性映画ではなく、香港フィルム・ノワールだ。

■□■5人の男たちは？■□■

香港フィルム・ノワールは男たちのカッコ良さで勝負だから、主人公となる5人の男たちの映画冒頭における登場もおしゃれ。今はマカオで妻ジン（何超儀／ジョシー・ホー）と住んでいるウー（張家輝／ニック・チョン）を訪ねてきたのは、ブレイズ（黄秋生／アンソニー・ウォン）＋ファット（林雪／ラム・シュ）の2人組とタイ（吳鎮宇／フランシス・ン）＋キャット（張耀揚／ロイ・チョン）の2人組。

たまたま2つの2人組が鉢合わせになったわけだが、ウーを含むこの5人は若い頃から共に育った竹馬の友。ところが、ブレイズとファットはかつて自分たちのボスであるフェイ（任達華／サイモン・ヤム）に銃弾をぶち込み、今はマカオに逃走しているウーを殺すためにやって来たのに対し、タイとキャットはウーを守るためにやって来たというからビックリ。折悪しく（運良く？）ウーは留守だったが、「なら、待たせてもらおう」と宣言した4人の男たちが待つ家にウーが戻ってきたから大変。さあ、ここで起きる1回目のドンパチは？最初に観客の度肝を抜くには十分な演出だが、銃撃戦の中でジンが抱き抱えていた赤ん坊の泣き声によって、男たちの銃声が止むことに。しかして、その後は・・・？

■□■車にはシートベルトを！銃撃戦には防弾チョッキを！■□■

2008年6月1日施行の改正道路交通法によって、後部座席でもシートベルトを着用することが義務づけられたが、これが意外と面倒で馴れるまでには少し時間がかかりそう。それと同じように(?)、しょっちゅう銃撃戦をやらざるをえない5人の男たちにとっては、防弾チョッキが必需品。それを思い知らされるのは、レストランの中庭で展開されるド派手な銃撃戦。

ここでの会合は、5人組がマカオのボスであるキョン（林家棟／ラム・カートン）を消すためにセットしたものだが、そこにフェイが別の思惑で登場してきたからややこしいことに。さらにそこで、殺せと命じたはずのウーがまだ生きていることを知ったフェイは、

命令を実行していないブレイズに対して大激怒。散々ブレイズをいたぶった挙げ句、フェイの拳銃が至近距離で火を噴きブレイズの胸元に命中したが、そこで命拾いできたのは防弾チョッキを着ていたおかげ。さあ、ここから始まった三つ巴の銃撃戦の行方は？

■□■ヤミ医者が大繁盛だが・・・■□■

国家資格を持った者でなければ医師の仕事ができないのは法治国家では当然。法治が貫徹されている日本（？）では到底考えられないが、正式名が中華人民共和国マカオ特別行政区であり、香港と同じように中華人民共和国と一国二制度の真っ只中にあるマカオでは、ヤミ医者が存在するらしい。

ホテルのレストランであれだけ派手な銃撃戦をやれば、死者や負傷者が出るのは当然。われらが「5人組」のうち重傷を負ったのはウー。そこで、残りの4人が急いでウーのケガの処置をしてもらうために駆け込んだのがヤミ医者というわけだ。5人が車に乗って必死で逃走している時、一瞬スクリーンが美女と野獣（？）のエッチシーンに変わる。観客はみんな「こりゃ、一体ナニ？」と思うはずだが、実はこれが金と女に卑しいヤミ医者を登場させるためのジョン・ウー監督らしい伏線。

売春婦とのエッチを中断しての緊急手術だから5万とふっかけたのかどうかは知らないが、3万に値切られても承知したのは、やっぱり金がほしいということ・・・？私は金額はともかく、その腕の確かさが心配だが、裏社会に生きる5人の男たちにとっては、そりゃ仕方ないところ・・・？

■□■3度目の銃撃戦は？■□■

面白いのは、ウーの腹から弾丸を抜き取る手術が終わり縫合作業をしている最中に、ドアが激しくノックされたこと。素早く手術台を隠し、4人の男たちも隠れた後、売春婦がドアを開けると、あのレストランの銃撃戦でウーに股間を撃たれたフェイが、手下たちと共に傷の手当てを求めて乱入してきたから大変。

4人の男たちが息をひそめる中、フェイの手当てが始まったが、不穏で緊迫した空気はどこからか伝わるもの。さあ、そこから突如始まる狭い室内での銃撃戦は、この映画3度目の銃撃戦。4人の男たちは何とか外に逃げ出したが、フェイの手に落ちたウーは室内から外に放り出されたうえ、その身体には何発も銃弾が。車に乗せられたウーは「家に帰る」と言ったようだが、さて本当は・・・？

■□■チェン軍曹は台湾出身の歌手！■□■

ここまでの間に既にたくさんの男たちが登場したが、ジョニー・トー監督はあくまで5人組が好きらしく（？）、また後半の物語に彩りを添えるため（？）新たにもう1人のカッコいい男チェン軍曹を登場させた。チェン軍曹を演ずる任賢齊（リッチー・レン）は台湾

出身の歌手だが、賈樟柯（ジャ・ジャンクー）監督の『青の稲妻』（02年）の原題は、彼が歌った『任逍遥／漂泊の日々』そのもので、映画の中でもよく歌われていたから、よほどのヒット曲。

男のカッコ良さを特徴づける小道具としてはタバコが最適だが、彼はタバコの他にもハーモニカの名手。さすが人気シンガーだけに心にしみるハーモニカの音色は見事だが、もちろん銃の腕も一流。マカオ軍警察の軍曹である彼の任務は1トンの金塊の護送だったが、強奪団との銃撃戦で部下をすべて失ってしまった彼のその後の選択は・・・？

私に言わせれば、ホントにそれでいいの？と思うような甘い選択だが、まあ映画だからそれでもいいか・・・？そんな個性の際立つチェン軍曹のカッコ良さにも注目！

■女は行動は不可解？■

ジョニー・トー監督が描く男たちは時にガキのようにはしゃぎ回り、またエッチ話に花を咲かせている場合はただのおっさんだが、いざという時はあくまでクールで目的達成に向けて全力投球。そして、自己犠牲心に富んでいるうえ、銃の腕前は一流だからカッコいい。それに引きかえ、女の行動は？今は既に遺体となったウーを家の中に運び入れたプレイズやタイに対して、ジンがいきなり銃を向けたのにはビックリ。さらに、ほうほうの体で逃げていく4人組に対して、ジンが引き金を引き続けたのはなぜ？

面白いのは、その後ウーの死体の処理と赤ん坊を抱いての4人組探しへの出発。香港も土地は狭いがマカオはもっと狭いから、基本的に戸建て住宅はなく、すべて共同住宅。したがって、その部屋の中でウーの遺体にガソリンをかけて焼けば、共同住宅全体が燃えてしまうから、ジンがスクリーン上で見せる行動は現住建造物放火の大罪となるはず。

『レッドクリフ』では、劉備の妻子の救出に向かった將軍趙雲子龍が劉備の長子阿斗を背負って敵中を突破、帰還する有名なシーンが登場する。これはジョン・ウー監督がどうしても描きたかったシーンらしく、子供を抱えての銃撃戦は『ハードボイルド 新・男たちの挽歌』（92年）でも使われていた。ジョニー・トー監督が、赤ん坊を抱えたジンが4人組探しの旅に向かうシーンを強調したのはその対抗心だろうが、さてその成否は？

それはともかく、そんなジンの行動を知ったあの売春婦が、その情報をフェイたちに売り込んだから大変。フェイはジンを人質として（？）4人組をホテルに呼び出したが、さてそれに対する4人組の決断は？そんなこんなのジンの行動を見ていると、とにかく女の行動は不可解という他なし・・・？

■これぞ香港流！これぞジョニー・ト一流！■

この映画には、男たちが近距離で拳銃を突きつけあうシーンが再三再四登場する。日本のチャンバラ劇は、ここから斬り合いになっても何度でも斬り結ぶことが可能だから、それがいろいろと美しい絵になるが、こんな近距離で拳銃を撃ち合った場合まず外すことは

ないから、勝負は一瞬！私はそう思うのだが、香港流、ジョニー・トー流は意外にそうでもないようだ。

この映画では室内での銃撃戦の多さが目立つが、クライマックスもそれ。つまり、ジンを人質として（？）ブレイズたち4人を呼び出したホテルの1階がその舞台となる。もっとも、顔を合わせるやいなやいきなり銃を撃ち合ったのでは面白くないから、①4人の男たちがホテルのカウンターにあるウイスキーをがぶ飲みしたり、②インスタント写真のボックスで大はしゃぎしたり、そして③投げつけられた空き缶をサッカーボールのように蹴ったことが銃撃戦開始の合図となったり、そこにはジョニー・トー流のさまざまな「演出」が施されている。それもこれも香港流銃撃戦のカッコ良さを表現するためだが、その結末はそんなにカッコいい・・・？

「夜明けまで待っている」と言い残して1人金塊と共に船に残ったチェン軍曹は、その後どうなったのかこの映画は何も語っていないが、「金塊と共にのんびり暮らしたとサ」というストーリーはありえないから、彼にもきっとこの後いろいろな試練が待っているはずだ。最初のウーを含めた5人の男たち、そしてウー亡き後に残った4人の男たちは、この最後の銃撃戦によってボスのフェイとそれなりの決着をつけたわけだが、それってそんなにカッコいいことなの？私にはどうしてもそんな疑問が残ってしまうが・・・。

■□近いうちにマカオに行かなくっちゃ！■□

香港は1997年にイギリスから中国に返還されたが、1999年にポルトガルから中国に返還されたのがマカオ。香港は日本からの直行便がたくさんあり、日本からの観光客も多いが、さてマカオは？私が持っている03～04年版の『地球の歩き方 中国』では、「日本からの直行便はないが、台北経由で入ることができる」と書かれていたが、最新のネット情報によると、近年は日本からの観光客の増加に対応し、24時間運行のマカオ国際空港からマカオ航空による日本への直行チャーター便が頻繁に運行されているほか、2007年7月26日から関西国際空港とマカオ国際空港間にエアーマカオ（NX）による定期便が週3便（2007年冬スケジュール）就航しているうえ、2008年7月16日より、定期便が増便され毎日就航しているとのことだ。

また、香港返還はビッグニュースだったが、私を知る限りマカオのポルトガルからの返還はそれほど知られていないのでは？そんな心配をしていた私だが、この映画は返還直前のマカオが舞台だから、当然マカオの臭いがプンプン。マカオの面積は香港の面積の40分の1。人口は約50万人でうち95%が中国人で残り5%がポルトガル人とのこと。マカオのポルトガル風の街並みは魅力的で、2005年に「マカオ歴史市街地区」がユネスコ世界文化遺産に登録され、中国31番目の世界遺産となったとのこと。私も近いうちにマカオに行かなくっちゃ。

2008（平成20）年11月13日記